

知的障害児・者の親によるケアの現状と課題**－親に対するアンケート調査から－**

神戸女子大学 植戸 貴子（会員番号：2380）

キーワード：知的障害・親によるケア・アンケート調査

1. 研究目的

わが国の知的障害者のケアは親（とりわけ母親）に大きく依存してきており、親の高齢化や病気等によるケア機能低下が本人の QOL の低下を招いている。そして、親が倒れた場合等には、本人がショートステイを経て施設入所に移行するという「地域から施設へ」の流れが依然として残っており、さらにはケアに行き詰った親による子どもの殺害・無理心中の事件も報告されている。このような現状の背景には親によるケアの抱え込みや母子密着が存在することが、通所施設や相談支援事業所のワーカーの報告等によって指摘されてきた。しかし、この「親によるケアから社会的ケアへの移行に向けた相談支援」については、実践現場での模索が続く一方で、知的障害者福祉分野の実践研究が未だ不十分である。そこで、親によるケアの実態を把握し、社会的ケアへの移行の阻害要因・促進要因を明らかにすることが必要となる。本研究では、知的障害児・者の親を対象としたアンケート調査結果から、親によるケアの現状と課題を明らかにしていく。

2. 研究の視点および方法

2014年2月にA市の知的障害児・者の親が組織・運営するB会の会員を対象にアンケート調査を行った。依頼文・質問票・返信用封筒のセットをB会から全会員に郵送してもらい、回答した質問票は調査者宛てに返送してもらった。質問項目は、知的障害本人に関する質問（基本属性・生活状況・自立度・行動特性等）、親に関する質問（基本属性・ケアに関する意識・社会参加状況・ソーシャルサポート・子どもに対する思い・子どもとの関わり・専門職との関係等）、サービス利用状況、経済状況等である。本調査に先立ち、障害児・者と母親の関係に関する先行研究レビューと知的障害者・家族の相談支援に携わる通所施設や相談支援事業所のワーカーへの聞き取り調査を実施しており、その研究結果から、社会的ケアへの移行に関わると思われる要因を抽出し、本調査の質問項目を設定した。さらに、「Zarit 介護負担尺度日本語短縮版」（国立長寿医療研究センター）、「二次元レジリエンス要因尺度」（平野真理）、ダウン症児の自立に向けた親の関わりに関する質問項目（仁尾かおり）の一部の質問項目を、本調査に適した形に改変して用いた。

3. 倫理的配慮

アンケート調査の実施に際し、B会の役員に対して質問票を示して調査の目的・概要について口頭及び文書で説明し、調査協力の承諾を得た。会員への調査依頼文において、回答は無記名とし、調査への協力は回答者の自由意思によること、回答は統計的に処理し個人が特定されないこと、調査結果は論文・学会などで発表すること等を説明した。なお、

本調査については「神戸女子大学ヒト研究倫理委員会」の承認を得ている。

4. 研究結果

(1) 調査結果の概要

質問票送付数 977 通に対して 451 通の回答があり（回収率 46.2%）、無効票を除く 449 通について集計した。本稿では、本人・家族の状況とサービス利用状況について報告する。

(2) 本人の状況

平均年齢は 38.1 歳（16~72 歳、SD10.35）、男性が 66.8%で女性が 32.1%、療育手帳は A 判定が 54.6%、B-1 判定が 26.5%、B-2 判定が 17.1%、不明が 0.4%であった。居住場所・形態は、親との同居が 84.4%、入所施設が 4.7%、グループ（ケア）ホームが 4.7%、親以外の家族との同居が 3.6%、一人暮らしが 0.9%、その他が 0.7%であった。日中活動の場は、通所施設や作業所が 66.4%、一般就労が 23.2%、学校が 0.9%、家事手伝いが 0.7%、その他が 5.8%であった。何らかのこだわり行動があるとされた人は 57.0%、外出中にガイドヘルパーから連絡が入る等のトラブルがあった人は 11.1%となっていた。

(3) 親（家族）の状況

回答者の内訳は、母親が 79.3%、父親が 6.2%、その他（きょうだい・親戚等）が 6.7%で、不明等が 7.8%あった。回答者の平均年齢は 65.2 歳（39~90 歳、SD9.60）で、健康状態は「とても健康」が 6.7%、「やや健康」が 12.7%、「普通」が 48.8%、「あまり健康でない」が 18.0%、「健康でない」が 4.9%であった。また「週 5 日以上仕事をしている」人が 13.1%に対して「仕事をしていない」と答えた人は 61.2%、「週 1 回以上ボランティアや地域活動に参加している」人は 7.6%、「全く参加していない」と答えた人は 47.9%であった。

(4) サービス利用状況

過去 1 年間に「ホームヘルプ（HH）を利用した」人は 5.1%、「ガイドヘルプ（GH）を利用」は 38.3%、「ショートステイ（SS）を利用」は 26.0%であった。そして「GH について困っていること」としては、「利用条件が合わない（通学・通所に使えない等）」を挙げた人が 47.1%、「土日・祝日を使いにくい」が 32.7%、「時間数が不足」が 21.2%であった。また「SS について困っていること」としては、「緊急時に空きがない」が 73.5%、「SS 先が遠い」が 34.6%、「SS 先が選べない」が 19.1%、「日数が不足」が 13.2%であった。

5. 考察

B 会会員全体が高齢化していることもあり、本調査では知的障害者のケアは主に高齢の母親が担っており、ケアする家族の約 4 人に 1 人が健康ではない状態にあることが分かった。一方、サービスを利用している人は少なく、「利用条件が合わない」「緊急時に使えない」等の指摘からはニーズとサービスのミスマッチも窺え、親がケアを抱え込む要因の一つとなっている可能性も考えられる。今後は、調査結果の分析を進め、子どもの特性や親のケアに関する意識等との関連を探り、社会的ケアへの移行の促進要因・阻害要因を明らかにした上で、社会的ケアへの移行を促進する相談支援のあり方を模索していきたい。